



京都市文化観光資源保護財団

会報

No.19



もくじ

(随 想) 阿弥陀の信仰と阿弥陀堂

京都市立芸術大学教授 田村 隆照 P 4～6

シリーズ まもる ⑱ 嵯峨お松明式の伝承について

嵯峨お松明保存会々長 永井重太郎 P 7～8

会員だより P 8～9

保護財団の活動 P 9～11

会報題字 理事長 佐伯 勇

会	報
No.19	53. 1. 1

編集・発行

財団 京都市文化観光資源保護財団
法人
京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606 電話 075-771-6051

◆京の文化遺産を 守りましょう◆

◇京都市文化観光資源保護財団は皆様方からの暖かい寄附金をもって、京都の貴重な文化財、伝統行事、芸能並びに文化財周辺の景観をまもる事業をおこないます。

◇ご協力いただいた寄附金は京都市文化観光資源保護基金として京都市が責任をもって管理し、基金から生ずる浄財はすべて保護事業に充てることになっています。

あなたも文化観光資源の保護者として

金額の多少にかかわらずご協力をお願いします

ご協力ありがとうございました

寄附者芳名録（敬称略）

52.9～52.11

一個 人—

〔特別会員〕

*加藤五郎〈10万円〉

〔普通会員〕

*田中正男〈5万1千5百円〉

*左近眞二〈5万3百円〉

*左近智恵子〈5万3百円〉

*佐野綾子〈3万3千円〉

*伊藤ナツエ〈3万1千円〉

*本田善一郎〈2万4千円〉

〔賛助員〕

*児玉誠〈1万6千円〉

*井田喜智郎〈1万1千5百円〉

*長谷川すみゑ〈1万円〉

*加藤雅一〈1万円〉

*澤田周一〈7千円〉

*尾池恵美子〈5千円〉

*吉本明子〈4千8百円〉

*吉田佳世〈4千円〉

*矢野芳子〈2千5百円〉

*関崎みのり〈2千3百円〉

*鈴木光子〈2千2百円〉

真坂百合子〈2千円〉

近衛艶子〈2千円〉

石塚万佐子〈2千円〉

手塚栄子〈2千円〉

*野阪喜一郎〈1千3百円〉

中西麗子〈1千円〉

粕谷信子〈1千円〉

金谷年子〈1千円〉

伊藤昌子〈1千円〉

（*印は追加寄附の篤志者、寄附金額は累計額）



新年あけまして

おめでとうございます

財団法人京都市文化観光資源保護財団

理事長 佐伯 勇

新しい年のはじめに、みなさまのご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

昨年は文化観光資源保護事業をはじめとする当財団の事業運営について格別のご理解と絶大なるご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

さて、当財団も設立満九年目の新春を迎えましたが、事業の運営もみなさま方をはじめ、全国からの暖かいご支援により本来の目的である文化財の保護事業に積極的にとりくみ、その成果が年々あがってまいりました。これは、一重に国民1人ひとりの文化財保護に対する深いご理解によるものと厚く感謝している次第であります。

かえりみますと、昭和44年に当財団が設立されて以来、全国からの厚いご賛同とご協力により、設立当初の募金目標を達成し、財団設立の目的である文化財の保護事業が軌道にのってまいりましたことも、こうした国民各層の文化財保護に対するご理解の高まりのあらわれと存じております。

しかし、近年は都市の開発、近代化が急速に進むなかで、文化財保護が自然環境の保全とともに、その裏づけとなる財源確保の面で大きな果題となっています。文化財の保護と自然環境の保全については常に長期にわたる展望のもとに、地道な活動が要求されるものであります。

国及び地方公共団体におかれましても、こうした長期にわたる展望のもとに積極的な保護政策をとられることを切に期待するものであります。

来年は、当財団設立10周年を迎える一つのふしとなる年であり、今年は当財団が次の段階に飛躍するための基盤をかためる主要な年でもあります。

理事長といたしましては、昨年来の金利の引き下げの影響をうけ、財政的に多難な年を迎えることとなりますが、文化財保護を常に長期的展望にたって、更に充実した事業運営をおこなっていく所存でございますので、今後ともみなさま方の厚いご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げまして、新年にあたっての私のごあいさつとさせていただきます。

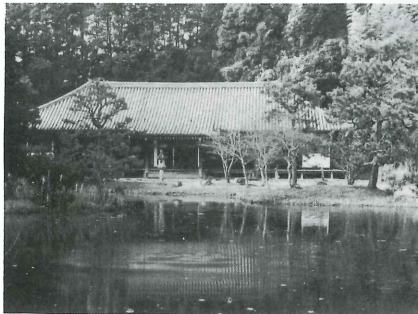
(随 想)

阿弥陀の信仰と阿弥陀堂

京都市立芸術大学教授 田 村 隆 照

「この世をば、わが世とぞ思ふ……」と詠じた藤原道長が営んだ法成寺は、寺町より東、鴨川の西、荒神口より北のあたりに建てられた善美をつくした寺院であったという。とくに無量

寿院九体阿弥陀堂は生前、中にこもって仏の相好を観じ、その功德をおもい、その仏名を称念した観法の間として、最も縁のふかいお堂であった。そして、病が重くなるや阿弥陀堂にその身を移し、そこで



願いの如き臨終をとげるので 九体阿弥陀如来を安置する浄瑠璃寺の阿弥陀堂 無量寿経変相図といわれる当
ある。お目には阿弥陀如来の相好を見奉らせ給い、お耳には尊き念仏をきこしめし、御心には極樂をおぼしめしやりて、御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせ給い、北枕に西向に臥させ給う。と栄花物語卷三十にくわしく述べるところである。手にした糸は、蓮の糸を村濃むらごの組にして作ったもので、九体の弥陀の御手を通して中台の御手にあつめ、それをひきながら称名念仏をしたという。いま当時の九体の阿弥陀如来を安置する寺としては奈良県との境に近い浄瑠璃寺（九体寺）があるだけであるが、記録によればかなりの九体阿弥陀堂がつくられていたという。八体の定印を結んだ阿弥陀に來迎印

（施無畏と願印）をとる中尊がやや大きくあらわされている。既に法成寺の像が失われているだけにどのような印相をもっていたかは不明で

あるが、横長の阿弥陀堂に入って横一列にならんだ九体の阿弥陀をすべて我が身にひきよせ導かれることの実感をうるための手だてとして組みひもが用意されたものと思われる。当時の徹底した阿弥陀信仰を想うことができよう。ついで天喜元年その子頼通によって造られた宇治平等院鳳凰堂は、翼をひろげたような形をとるところからその名が出たとも、あるいは中国漢代の画像石にもみられる鳳凰闕のように屋根の

棟に鳳凰をかざりとしてつけたところからの名称ともいわれる。江戸時代には風に吹かれて舞ったというが重量のあるものだけにこれはあくまでも伝説である。それはともかく、この建物は直接的には観

麻マンダラに表現されている阿弥陀の浄土の宝楼閣をこの世にあらわしたものと考えられ、極樂のさまを見たければ、宇治におじゃれと童歌にうたわれたという荘麗な建物であった。いまでも宇治川の岸近く浄土のたたずまいをみせて多くの人たちが訪づれる。大分値うちがさがってはいるものの電話や買物など日常生活に欠かすことのできない十円銅貨の裏意匠としてもなじまれている建物である。この阿弥陀堂で頼通はなにを願ったのであろうか。その頃の貴族たちは既にふれた道長がそうであったように、死んで阿弥陀に救済されることを待つだけではなかったのである。すなわち、生きているうちに阿弥陀を念じ阿弥陀と一体になることを日々修し、そして生きながらにして極樂浄土にあることを想念する修法に深い関心をもっていたので

ある。即ち定印の阿弥陀如来一体を中央にまつる阿弥陀堂は信仰的には、マンダラの空間であり、自らそこに参入するためのほとけの空間であったのである。

鳳凰堂の中央にまつられる定印の阿弥陀の場合は長押の雲中供養のほとけたちにかこまれ、九品往生図などを描いた扉の中に安置されているところから考えて、密教のマンダラの中の阿弥陀であると又同時に浄土の阿弥陀という二つの性格をもつほとけであったといえよう。

そのことは堂内に正坐して阿弥陀と真向うとき瞑想禪定の密教のほとけであり、池をへだてた東正面からこのお顔を拝めば、大きく見開かれた目が今なお説法しつづけていることをあらわしているのである。

この表現の秘密は斜めに彫られた眼と瞳の入れ方にあると思われるが、ひたすら瞑想の弥陀としてつくられたのが法界寺の阿弥陀や約百年おくれでつくられた花園法金剛院の阿弥陀である。そのほか現在京都国立博物館にある万寿寺の像や即成院、法華長講堂の阿弥陀像などすべて定朝作の鳳凰堂阿弥陀如来坐像を規範にして造像された定朝様の像である。

この中で醍醐の南、石田から東の山手に入るところにある日野の法界寺は堂の建立年代に諸説があるものの、当時の信仰を実感することのできる阿弥陀堂をのこす寺である。そもそも定印の阿弥陀を中心において、行道しながら称名し念仏する常行三昧は、円仁（慈覚大師）が中国唐より伝えたもので、彼によって叡山にそれを修するための常行三昧堂が建立され、それ以後各地に営まれたものである。

法界寺の場合は四天柱に密教の金剛界マンダ



日野の法界寺 阿弥陀如来像

ラの諸尊が描かれ、本来大日如来の配置されるべき中央に阿弥陀が彫像として安置され阿弥陀のところに大日如来が描かれているのである。その柱絵は後世のような単なる装飾的な意味の仏画ではなく、あくまでもマンダラの空間を示すもので、密教的な空間の中で密教的観法の三昧が行われたことを示していることができる。

私たちがこの寺を訪づれると先ず桧皮葺きの屋根のおちついた優美なたたずまいの阿弥陀堂の外観にしばらく足を止めるにちがいない。このあたりに近く方丈記をかいた鴨長明の庵があったところといわれる静かな日野の里である。乞うて堂内に入るとひとりほとけと対坐して瞑想のときをもつことができる。それは静かな堂の空間の中でほとけと自分が一つの世界を共有するひとときであり、そして真摯な願いをこめて常行した当時の人たちの心に近づけるときでもある。まさに理想的なほとけの出会いとはこのような出会いをいうべきなのであろう。

定朝以前の定印の阿弥陀像といえば、空海が伝えた両部マンダラをもとにつくられた、紫綾

地金銀泥の高雄マンダラにあらわされたものである。しかし独尊として表現されたものは現存し、彫像としても比叡山など多くの常行三昧堂の本尊としてつくられた弥陀像はすべてこの印相であったと思われるが、現存するものとしては五智如来の一体としてあらわされた安祥寺、（現京博保管）像、御室仁和寺の阿弥陀三尊、嵯峨の清涼寺のもとの寺、棲霞寺の阿弥陀三尊の中尊などでさすが密教的雰囲気や濃厚に伝える像である。そして何故あの地にそのような巨大な像が造られたのであろうかという疑問が拭えない岩船寺の阿弥陀があるが、いずれも宝物館や仮堂に安置されているもので、法界寺像のような堂空間でないことが惜しまれる。

このように平安時代前期にマンダラが伝えられてはじめて定印の阿弥陀が表現されるがそれ以前の阿弥陀の印相としては、飛鳥時代のものは通仏印といわれる施無畏、与願が普通であった。一光三尊像として有名な善光寺如来もこの印相の中に入るものである。

又両掌を胸前でその指をまげたりして説法をあらわす転法輪印の阿弥陀如来像が奈良時代に多くつくられた。法隆寺金堂壁画六号壁の中尊、当麻マンダラの中尊すべてこの印をとる。奈良法華寺につくられていたといわれる阿弥陀浄土院の本尊もおそらくはこの転法輪印の阿弥陀であったと思われる。それは平安時代に入って画いたと思われる法華寺所蔵の阿弥陀画像がこの印相であり、又この浄土院の本尊を忠実にうつしてつくられたと思われる太秦広隆寺の講堂の阿弥陀像がこの転法輪印をとるからである。奈良時代多くつくられたこの転法輪の阿弥陀像こそ西方極楽浄土で説法するその姿をあらわした

ものである。このように顕教の阿弥陀表現と即身成仏を理想とする密教の阿弥陀には大きな違いがあり、堂の空間もまたそれにしがったものであったことを示すことができる。来迎を待ちうけ、それを期待するだけの平安時代末から鎌倉時代になると阿弥陀の印相もはっきりした来迎引摂印をとるようになり脇侍の観音、勢至の姿にも変化がでて来る。道長や頼通の発願した当時の阿弥陀如来や阿弥陀堂が平常の観行を重視していたのとはやはり大きなひらきがあったというべきであろう。

※前号（No.18）で掲載の「東寺の塔と密教のほ」とけ、で2ヶ所、印刷の誤りがございましたので次のとおり訂正させていただきます。

4 ページ 上7行

誤）再建されたのが東寺

正）再建された東寺

4 ページ 上23行

誤）いたく感じるであろう。

正）いなく感じであろう。



3月15日「嵯峨お松明」、
三基の大松明の火勢で豊凶を占う

シリーズまもる ⑱

嵯峨お松明の伝承について

嵯峨お松明保存会々長 永井重太郎

京洛の春に魁けて、毎年三月十五日の涅槃会に執行される「嵯峨釈迦堂のお松明式」は、大文字、鞍馬の火祭と並んで、古都の三大火祭として知られた京都の年中行事である。

抑も、このお松明の由来は、釈尊を茶毘に付した行事に始まったもので、本堂前に立てられた高さ2.1丈、2丈、1.9丈の三基の柱松明は、早稲、中稲、晩稲の稲の品種になぞられ、火焰の勢い、燃え工合に依り、その年の稲作の豊凶を占う農業祭となり、また、13本の高張提灯の高低は、江戸時代には米相場近世では月々の株界景気を判ずる商業祭とも云はれ関係者の関心が深いのである。

当日は、朝から境内の内外に露店が立並び、鐘楼には、近所の子供達が集り松明の終るまでゴーンゴーンと鐘を打鳴し、本堂では早朝から涅槃法要が営まれ、終日善男善女で大賑いを呈する。夕刻からぞくぞく詰めかけた観衆は、点火の定刻8時前には、さすがに広い境内も文字通り立錐の余地もない迄に轟き合う。そして、点火に先立って、古式に則り檀信徒の行列が、お松明を三周、読経の中に燃え盛る火だねが次ぎ次ぎに投げ込まれ燃え上る火焰は、まさに「数頭の火龍、天を嘗る」様相を呈し、壮厳というか、神秘というか表現が出来ない。点火後15分間位が最も見ものである。



3月14・15日の両日にわたり松明の組み立てがおこなわれるが、資材集めはすでに11月頃からはじめられている。

しかしながら、このお松明づくりには、数ヶ月がかりの資材集めと労力が必要なものであって、その資材の主なものを挙げると次の通りである。

1、青松葉 3～4尺新芽のもの大束65束。

青松葉は11月上旬から12月上旬にかけて伐採されたものが最適であるシュン以外のものは葉が赤枯れたり、また生々しくて、燻って燃えにくく、不適合なのである。以前、松割木が燃料に供給されていた頃は、近くの山で比較的たやすくシュンのものが収集されたが、現在では材木を伐採する時以外は容易に入手出来なくなった。

1、真木（軸柱）2.1丈、2丈、1.9丈の直材のもの何れも3本宛、同じ長さの支柱用材9本。

1、小張り（杵組用横棧小丸太材）110本。

1、藤蔓2トン、35尺のものから1尺宛短いもの36本と小藤（細藤）。

お松明には針金や藁縄は一切用いず全部藤を使用するため、小藤が多量に要るのであるが、これを早く採って置くと、硬くなって使用出来ないの、使用前一週間前に採らねばならない。

1、青竹の割ったのと柴（つつじ）。

上記の資材は、総てシュンに収集することが必須条件であるだけに、平素から山持ちや山林業者等に依頼して採して貰わねばならず、なかなか、藤の群生地などは、よほどの密林か、原始林的な所でないと多量に採れないので、どうしてもハンター達の情報に頼らねばならないと云うのが実情である。そしてどんな深山

奥山で搬出困難な場所であっても収集に出かけねばならぬことゝなる。それで年によっては、遠く丹波や滋賀県堺までも幾日も出向くといったことも多く、とにかく資材入手には多年経験深い作業員の想像を絶する労苦に依存せねばならないのである。

さて、このような難儀をして、ヤット集めた材料で、3月14・15の両日三基の松明を組立てるのであるが、これには延数十人の熟練者の労力が必要とされ、永年に亘って、壇信徒の農山林従事者の善意と奉仕に支えられて来た次第である。かくして永年親から子、子から孫へと伝承されてきたこの松明作りも、近年後継者難に陥り、由緒あるこの伝統行事もその前途が危まれていたが、2〜3年前から「遠い先祖から受け継いできたこの伝統の火を消してはならない」との関係者の悲願が、地域住民の幅広い共鳴を得、加えて文化観光資源保護財団のお力添えとに依って、漸く存続の見透しがついたことは、誠に御同慶の至りに堪えず、この上共関係各位の御支援を偏にお願いする次第です。

付記——お松明作りの工法

三本の柱を軸として、上部火入口は一辺9尺の正三角形とし、1尺5寸毎に12本。3方36本の小張りで枠組をし、18束の松葉を1握り宛細藤で止め、その上に縄状に1本の藤で鉢巻をし、根本で天狗の鼻状に結び、先端の方で蝸牛状（かたつむり）結びとする。

会員だより

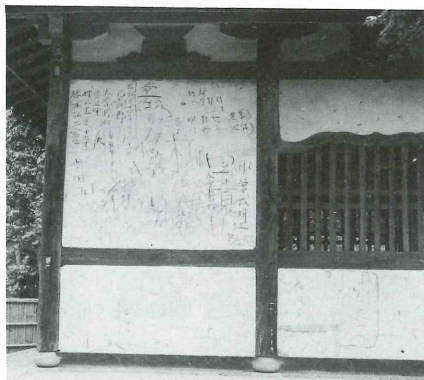


雑 感

京都市北区紫竹上梅ノ木町6
主婦 小林 芳江

京都に生れ育ち60余年、ずっと京都の中心に住んで、小学生の頃から、平安神宮、清水寺の写生、南禅寺での林間学校、娘時代には集印帳を持って、嵯峨方面、泉涌寺方面の御陵巡り等、よく歩いたものです。家を一步外に出ると、どちらに足を向けようかと迷う程、四方文化財、観光資源に恵まれている仕合せを、年齢を重ねるに従い、ひしひしと感じています。

重要文化財は、申すに及ばず、余り有名でない、ひっそりとした神社、仏閣にも千年以上の歴史が有り、現代の様な便利な道具の無かった時代に、よく此の様な立派な建造物や、精巧な美術工芸品が出来たものと、驚き感心するばかりです。之も資材を厳選し、年を重ねた修業の賜物でございましょう。にもかゝらず、折角戦禍を免れ乍ら、終戦後の金閣寺炎上以来、平安神宮、方広寺、梨木神社、引接寺、東本願寺



某寺院の御堂 我家にこのような落書をされたらどのような気分になるでしょうか。

等幾多の大切な建造物が、主として人災により灰になったり、破損されたりして誠に惜しいと思います。先日御所散歩の折、壁の落書を見て情ない思いをしました。

外国の観光客が御覧になったらと身のすくむ思いでした。日本人、殊に京都市民の恥です。妙満寺が寺町から幡枝の方へ移転した折、広々とした良い御寺が出来て、年月を重ねたら、之に佗が加わり、増々立派な寺院になると期待したものでした。それが此の秋訪ねまして筋堀に一杯の落書で、佗のつかないうちにこれではと、胸の痛む思いをしました。

又稀には文化財がお金に化けて行方不明の記事を読む事も有ります。

先人はもっともっと文化財を大切にしてくださいと思います。市民の一人一人が祖先の遺産を、日本人の故郷京都の宝を大切に保存して、世界の人々に誇りを持って、見学して頂けるよう努力しようでは有りませんか。主人も微力乍ら今後も細やかな寄附を読けさせて頂き度いと申して居ります。財団の方々には日夜御心労の多い事とお察し致しますが、何卒宜敷くお願い申し上げます。

文化財の溢れている京都で有り乍ら伝統産業的な技術の後継者が少い様に思います。世襲とか徒弟制度で最近では技術を磨いている若い人が少いづつ増えてはいる様ですが、文化財の修理補修の面からも、京都市の文化事業の一つとして後継者の養成機関の様な物を、開設して頂ける様、財団の方で御尽力頂き度いと存じます。今の私は自分の足で京都を歩き、無尽蔵の文化財を見聞して廻り度い希望にふくらんでいます。

52. 11. 20 記

保護財団の活動

郷愁をかきたて
郷土芸能の夕、盛況に終わる

ふる里の味を満喫する

今回で第8回目をむかえ、すっかりなじみ深くなった秋の行事「郷土芸能の夕」を去る10月15日(土)午後6時半より京都会馆第2ホールにおいて開催、会場は日頃忙しく伝統行事、芸能を見に行く機会の少ない人々で満席、中でも日本の伝統ある行事、芸能を見ようと外国からのお客さまが多く見うけられ、最後まで英字プログラム片手に熱心に鑑賞していた。外国からのお客さまは、回を重ねるごとに増えてくるようです。

今回はテーマを「伝統行事、芸能でつづる京の町かどの風物詩」と題し、京の代表的伝統芸能の一つである六斎念仏踊を中心に、伝統行事をはじめ演劇塾長田学舎の「町かどの芸能、そして近年うたわれることも少なくなった京のわらべうた（あいりす児童合唱団）をまじえての夕べ。

干菜系と空也系の二つの系統の六斎念仏を一堂に会しての初めての公演とあって、今回出演していない六斎保存会から多数鑑賞に来られていた。干菜系六斎の「静」と空也系六斎の「動」の伎を舞台一杯に披露。また一度六斎の太鼓、鉦を打ってみたいと場内のお客さまが舞台に上がり保存会の人から指導を受け、太鼓、鉦を打つなど、会場はなごやかなふん囲気につつまれた。

伝統行事では、上賀茂神社でおこなわれる重



なごやかな気分で、郷土芸能の夕、を開催
陽の神事、鳥相撲、そして北野天満宮の秋祭で
知られる瑞饋神輿が出演。とくに1トン余りもあ
る神輿を舞台でかつぐという大仕事で、舞台うら
では、事故があっては大変と総動員のスタッフ
は汗だく。出演時間はほんの2～3分では
あったが神輿をかつぐ威勢のいい掛け声が場内
にひびきわたるなかで幕を閉じた。昨年につづ
き本催しの構成、演出をいただきました長田
純先生をはじめ、各出演団体のみなさまのご協
力に対し厚くお礼を申し上げる次第であります。

第18回文化財特別参観終了報告 紅葉と落葉の散り敷く京都洛西 「浄住寺」と「地藏院」 の文化財を鑑賞する —11月26日(土)—

あいにくの小雨降る冷えこむ悪天候の中であ
ったが、これまでの最高の70余名の参加者のも
とで第18回文化財特別参観を実施した。

予定以上の参加者のため、特に2班にわかれ
ての見学。浄住寺では、この事業のためにと特
に当寺に伝わる古文書、絵画などの貴重な寺宝
を展示公開していただき、ご住職からその由緒
などのお話をいただき、境内を見学。地藏院で
は、方丈の前庭、十六羅漢の修行の姿を表わし

た平庭式枯山水庭園を鑑賞しながら、禅宗につ
いてのお話や、当院にまつわる興味深い話に耳
をかたむけていた。また、竹の寺と称される当
院の孟宗竹と紅葉のコントラストが今回の特別
参観に色を添えていた。冬のおとずれを感じる
11月の末、参観者は冷たくなった手をこすりな
がら見学、遅い秋のおとずれであったが、洛西
はすっかり晩秋の気配であった。



文化財を火災からまもる ために皆様のご協力を!!

これまでに幾多の文化財が失なわれてしまし
たが、その最大の原因は火災によるものです。
一度焼失した文化財は二度ともどってきません。
今回この紙面をおかりして貴重な文化財を火災
からまもるために京都市域の文化財の火災原因
などをご紹介します、皆様からのご協力をお願いす
る次第です。なお、本資料は京都市消防局のご
提供によるものです。(京都の文化財の80パーセ
ント以上が市内の社寺で保存、管理されている
もので、過去の文化財火災もほとんどが社寺関
係によるもので、本資料は社寺火災を中心にま
とめられました。調査対象期間：自治体消防が
発足した昭和23年～昭和52年10月31日)

■社寺火災発生件数

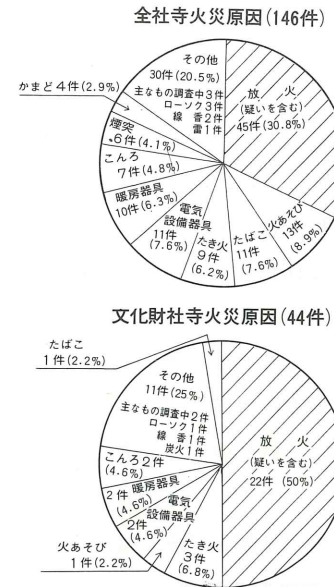
146件(うち指定文化財所有社寺(以下「文
化財社寺」という)44件)
年平均社寺火災4.8件(うち文化財社寺
1.4件)

■原因別火災発生状況

別表1のとおり

※特徴：社寺は一般的に広大な敷地を有するに

(表1)



もかわらず、人手不足で監視が行き
とどかなく、また社寺の特性として開
放的であるため浮浪者等による放火、
たばこ、火あそび、たき火によるもの
が多い。

■月別火災発生状況と火災原因との関係

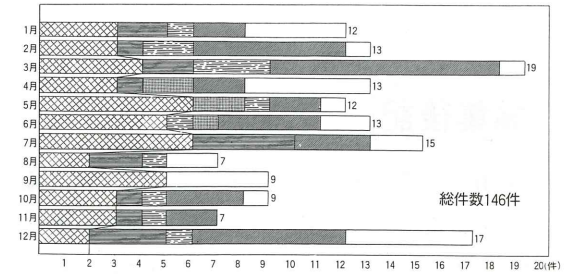
別表2のとおり

※特徴：社寺以外での火災では、火気取扱いの
増える12月にピークを迎え、1月以降
に減少しているのに対し、社寺火災で
は春先の乾燥期である3月にピークを
迎える。

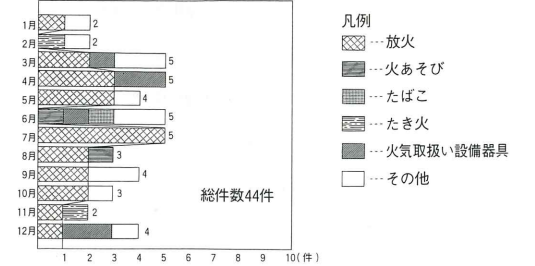
文化財を火災からまもるためには、文化財所
有者、管理者の努力はもちろんだが、それだけ
では万全を期すことはできません。文化財建造
物などに訪れる国民一人ひとりに防火のマナー
を守っていただくことも大切であります。1月
26日は文化財防火デーです。京都市消防局では
1月23日～29日までの一週間を文化財防火運動
として活動されますが、皆様もご協力下さい。

(表2)

全社寺火災件数と原因



文化財社寺火災件数と原因



第19回文化財特別参観のご案内

「曼殊院」と「金福寺」

今回は、京都洛北一乗寺にある江戸時代の数
多くの文化財を今に伝える洛北屈指の名刹曼殊
院と俳人、芭蕉と蕪村ゆかりの深い金福寺をた
ずねます。

- ◇参観日時 昭和53年3月11日(土)
午後2時(参観時間2時間)
- ◇対象 財団募金協力者(会員)とその
家族(申込み多数の場合制限す
ることがあります。)
- ◇申込方法 往復はがき1人1枚に住所、氏
名、年令を記入
- ◇申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺
町京都会館内 京都市文化観光
資源保護財団
- ◇参加費 不参加

編集後記



■ 新春のお慶びを申し上げます。

あわただしい人の動きが止まり、百八の鐘の音とともに新しい年を迎え、皆様方におかれましてはこの新春を様々な思いで迎えられていることと存じます。当財団事務局スタッフは、この一年を昨年に増して京の文化観光資源をまもるために努力してまいる覚悟でございますので皆様方におかれましても倍旧のご支援、ご協力を賜わりますよう切にお願い申し上げます。

■ 〴〵お正月、年中で一番日本らしさを、京都でいえば古都の風情をもっとも感じられる時であります。しかし、年々都市開発が進む中で、お正月の行事、習慣、そして遊びもずいぶん変わってきたように思います。とくに、明治生まれ、大正生まれの方にとっては昔なつかしいお正月行事をおもいおこされることと存じます。かるた遊び、羽ねつき、こままわし、すごろく、タコあげの遊びの中でも、皆様の家庭でおこなわれている遊びはどれだけありましょうか。

民俗文化財をはじめとする文化遺産も同様に、

近代化の進む中で生活様式が変わり、習慣も変わる中で私たちの生活から遠ざかり、わすれられ、失われていくように思います。文化遺産は、私たちのこれからの文化の創造になくしてはならないものです。そして貴重な文化遺産を次の世代に引きつぐことは、現代人に課せられた責務でもあります。皆様におかれましては、この年頭にあって新しい抱負をおたてのことと存じますが、その中で私たちの身近な文化遺産についていま一つ見直してみてもいいかがでしょうか。

表紙写真解説

■ 醍醐^{にんのうえ}五大力尊仁王会の

〴〵五大力餅あげ競技、

醍醐寺では開山以来1000余年の今に至るまで毎年2月15日から23日の間、鎮護国家、万民豊樂を祈念する五大力尊仁王会の法要が上醍醐五大堂においておこなわれ、一般には五大力さんと呼ばれ厚い信仰をうけている。

23日は、午前10時より大法要がいとなまれるが、同日市内の信徒によって奉納された五斗の大餅〴〵五大力餅、を五山力さんに献供されたあと、下醍醐金堂前において午後1時より、その五斗の大餅を持ち上げるという力くらべの競技がおこなわれ、優勝者には五斗の大餅（五大力餅）一組が授与される。

競技は、木の台にのせられた五斗の大餅を台ぐち持ち上げ（約150kg）その持ち上げている時間の最も長いものが優勝者となる。

——京の年中行事より——（1月～4月）

1月1日 歳旦祭	市内各神社	泉涌寺涅槃会 午前8時	泉涌寺
4日 蹴鞠始め 午後2時	下鴨神社	15日 涅槃会・お松明式	清涼寺
10日 十日ゑびす 午後2時	恵美須神社	4月6日 白川女花行列 北白川天神宮(正午出発)	
14日 裸踊り 午後7時	法界寺		京都御所
15日 柳のお加持と弓引始め 午前8時	三十三間堂	10日 川上やすらい祭 午後1時	川上大神宮
	市内各社寺	第2日曜 今宮やすらい祭 午前11時(光念寺出発)	今宮神社
2月2日～4日 節分会			玄武やすらい祭 午後1時 玄武神社
23日 五大力尊仁王会 午前10時	醍醐寺	21日～29日 壬生狂言	壬生寺
24日 さんやれ祭 正午	上賀茂神社	(午後1時～午後5時 29日のみ午後10時まで)	
25日 梅花祭 午前10時	北野天満宮		
3月14日～16日 東福寺涅槃会 午前9時	東福寺		

※都合により行事日時変更の場合がありますのでご了承下さい。